産炭地域における「同郷性」
― 与論島出身者の
移住過程と同郷団体を事例に ―

日本地理学会2014年秋季学術大会
都市社会地理研究G・大衆文化の地理学研究G
2014. 9. 21 （於 富山大学）

中西 雄二
（東海大学）

Ⅰ はじめに

◎ 本研究の概要

事例）
・旧三池炭鉱周辺（福岡県大牟田市・熊本県荒尾市）における与論島出身者の移住過程

― 同郷者間の組織化・活動の様相
集住地区の形成・生活実践

・・・ 境界地 borderlands としての文化的、社会的周縁性
・・・ （旧）産炭地域の都市空間における社会的複層性の分析

第1図 与論島の位置

■ 日本における都市移住者（同郷者集団）への注目

●松本（1969，1971）を先駆とする一連の社会学的研究

・「都市の中のむら状況」（松本・丸木1994）

・複雑な都市の諸相を探る手段として
（湯浅2000，山本2000，鰺坂2005）

― 都市移住者にとっての移住・生活に関わる適応機能

■ 地理学における同郷者集団研究

・人口移動の空間的パターン
（岡橋1987，1990，須山・鄭2004）

・都市内部での「自己同一化の場」（岡橋1989）
― 他分野でも象徴的側面への注目（例えば、小林1994）

・連鎖移住と業種特化 （田島1991，宮崎1998）

・多様なネットワークと集団化の要素 （山口2008）

・・・ 空間的パターン、連鎖移住・就業状況、ネットワーク
→ 都市の「オールドカマー」としての国内移民（鰺坂2005）
エスニック集団研究との異同、国民国家との関連
（冨山1990）

■ エスニック集団研究の影響

…⇒ 奄美出身者

・・・ 企業の労務管理と密接に関連した
集住地区や同郷者ネットワークの形成
— 連鎖移住、縁故採用、再移住、
地域を越えたネットワーク

・・・ 文化的、経済的周縁性

— 「同化」と「異化」、底辺労働者としての
歴史的な就業形態
— 加えて、近年（1990年代～）の
文化的実践への傾斜

■ 鉱工業都市を対象とした研究

➥ 近代化過程での急激な都市化・人口膨張

・戦前期の「分布論的」研究（丸井1969）
・「炭鉱集落」の形成過程
（山口1942，川崎1973，社宅研究会2009）
— 「鉱山集落自体、鉱山経営の空間的パターンを中核として構成される」（川崎1973）
・生産に着目した経済学や経済地理学分野での蓄積
（矢田1975，畠山1976，岡田2009など）
・「合理化」、衰退期における産炭地域の変容
（丸井1961，堤2006）
・「旧鉱工業都市」の脱工業化と地域イメージ（森嶋2011）

・・・ 都市移住者研究の分野での蓄積の少なさ

◎　産炭地域の社会

● 炭鉱住宅を核とした強固な「コミュニティ」
・「炭鉱と労働組合とにまったく集中した職場と住居と社会生活との結びつきも強さは、これらの閉鎖的なコミュニティを非常に結束力のあるものにした」（ジョンストン2002）
・「明るい炭鉱」（吉岡2012）

● 一方で、社会的に構築されてきた
「同郷性」を鍵とする「コミュニティ」
➡ 同郷者集団におけるアイデンティフィケーションの変容過程と諸実践の在り様

■　事例に関する先行研究の蓄積

・郷土史家、社会運動家らによる記録、記述
— 新藤（1965）『三池鉱山と与論島』、
新藤（1985）『赤いボタ山の火』
— 森崎・川西（1971）『与論島を出た民の歴史』

・メディアによるルポルタージュ・記録
— 井上（2008）『三池炭鉱「月の記憶」』
— 熊谷（2012）『むかし原発いま炭鉱』
・・・　映画『三池』（2005）

■　事例に関する先行研究の蓄積

・分野横断的な学術的成果
　経済学、経営学　―　宇田（1967）、戸木田（1989）、
　　田中（2009）
　文化人類学、社会学 ― 髙橋（2002）、久吉ほか（2011）
　　・・・　生活史への着目

⇒　集住地区の状況や同郷団体の活動状況をもとに、産炭地域という空間における「同郷性」の様態を分析する必要性
⇒　「同郷性」／労働者（階級）／イデオロギー・・・

◎本研究の目的

・産炭地域における都市移住者（与論島出身者）の移住過程
　― 同郷者間の組織化・活動の様相
　　集住地区の形成・生活実践
　・・・　境界地 borderlands としての
　　文化的、社会的周縁性
　― （旧）産炭地域の都市空間における
　　社会的複層性の分析
　― 集住地区という空間の編成過程、
　　空間的な管理への視点

Ⅱ　与論島からの集団移住

・与論島の台風災害（1898）

・上野應介村長、東元良以下238名の集団離村（1901）
・・・　三井鉱山、鹿児島県の斡旋

— 長崎県口之津村へ石炭運搬労働従事のため移住
「与論長屋（納屋）」（世話方制度）
三井鉱山の募集人（仲仕請負人・世話方）を介して

— 「ゴンゾウ」 劣悪かつ、相対的に低い労働条件水準

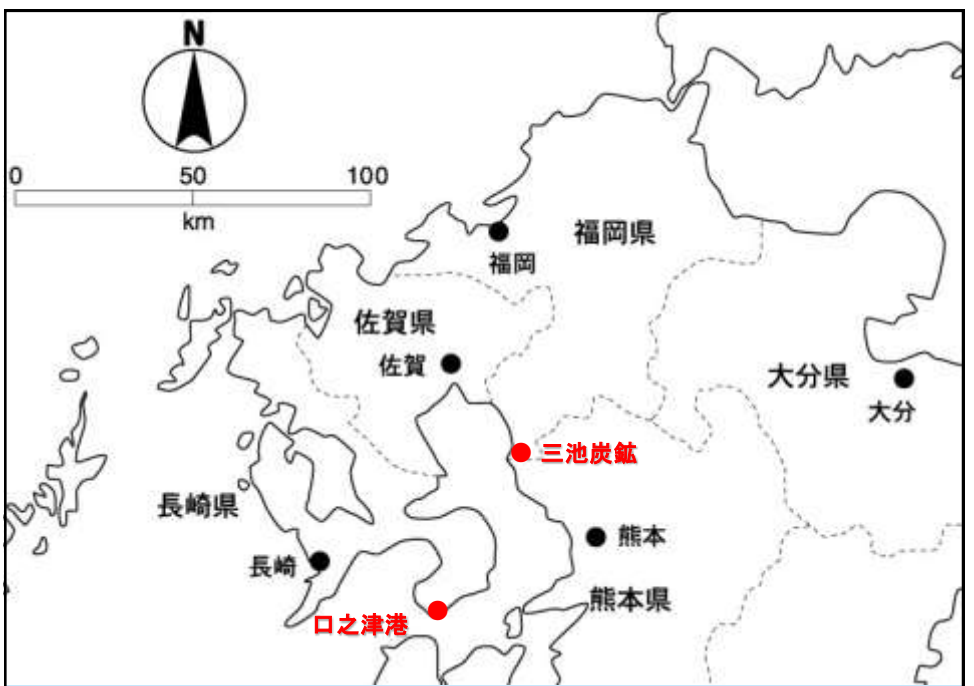


図　三池炭鉱と口之津港の位置

※ 三池炭鉱の労務政策

・「土着永住」策（畠山1976）

・・・ 「渡り坑夫」を敬遠し、「家族持」の労働力を採用

「土百姓ニシテ世ニ慣レザルモノハ足ヲ止メ候（中略）世慣レザルモノノ外ハ断然募集セザル事ニ致申候就テハ賃銭ノ如キモ此際特ニ増加スル必要モ認メザル次第ニ御座候」

（『三池鉱業所沿革史』第7巻）

三池炭鉱における採運炭夫出身地調べ

	福岡県	熊本県	宮崎県	鹿児島県	沖縄県	全体
1901年（上半期）	584	550	13	7	0	1,348
1902年（上半期）	896	1,174	33	63	0	2,480
1917年末	1,209	2,196	224	414	8	4,820
1922年末	791	1,877	258	549	245	4,341
1925年末	726	2,209	430	452	298	4,531

資料：『三池鉱業所沿革史』第7巻、畠山（1976）をもとに作成。

・募集請負人制度（～1909）

— その後、世話方制度に引き継がれる

・募集嘱托人・周旋人制度（1901）

➡ 囚人労働から一般坑夫への大規模な転換期

— 特定地域の有力者を嘱托人として、募集請負の円滑化を図る

・縁故募集

— 同郷者間の監視体制（先輩、部長（組長）、相互）

⇒ 空間的な労務管理

■　三池移住と過酷な労働条件

・三池港完成（1908）　・・・　口之津港から荷役の拠点が移転

　　―　428名の与論島出身者が再移住

　　三池港務所管轄　　帰島623名、残留73名

・世話方制度　―　請負人、部長（監督者・全7組）

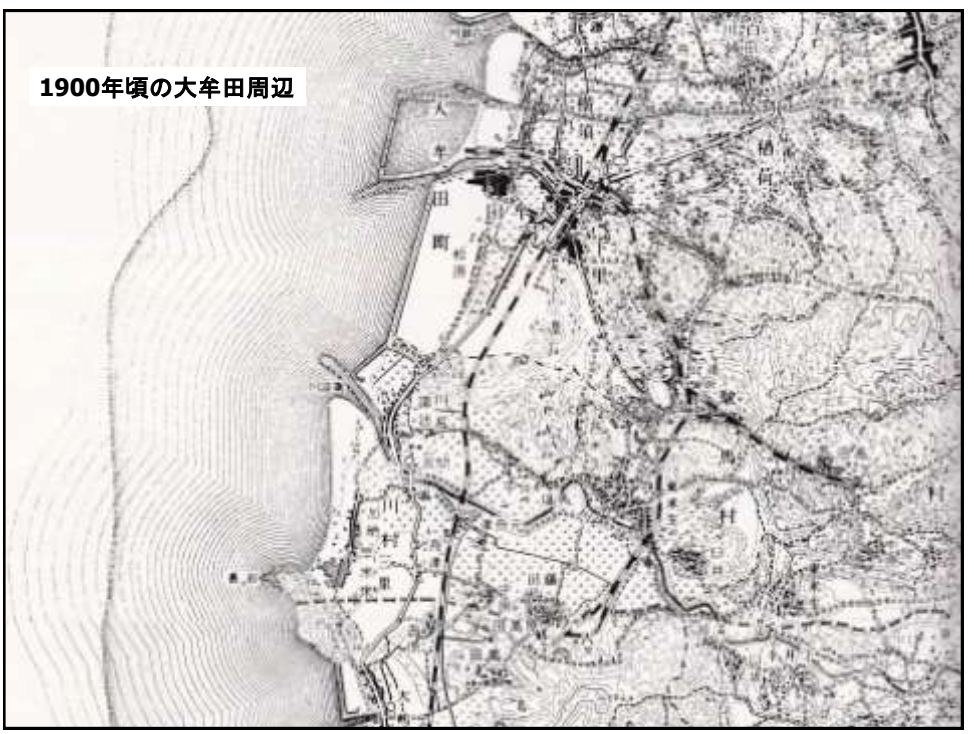
　　→　1942年の三井鉱山による直接雇用移行まで継続

与論出身者の組別編成（1908時点）

監督者	組名	男	女	計
東元良	末組	20	17	37
	喜組	22	21	43
	川組	15	17	32
上野應介	伯組	17	21	38
	定組	30	15	45
	堅組	27	13	40
南彦七郎	藤組	35	22	57
計		166	126	292

単位は（人）。

資料：与洲奥都城会（1966）。



・『福岡日日新聞』「三池の与論村　全く鎖国主義の一部落」特集（1913年9月）

「三池港に与論納屋という珍妙な長屋建ての一部落がある。（中略） 土地の人は一種の卑下した言葉で其部落を与論村といい其住民を与論人と呼んでゐる。
（中略） 周囲の内地人とは絶対に交通を避け鎖国主義を執る丈けに言語風俗人情習慣等の凡て全然秘密の帳に包まれ、頗る興味多き一ヶ村である。現在戸数百十一戸、人口六百二十人、内男子三百二十五人、女子二百九十五人は本年一月の調査であるがそれから八ヶ月を経過して今日は殆んど二十人位は殖てゐるそうである」
（『福岡日日新聞』1913年9月4日）

『福岡日日新聞』1919年9月の特集記事

▲燒酎の醉に浮かれ　單調なが

ヤ〳〵した鬱をおざつてゐたのは全く

日本人種の間にこんなのがあるかなアと

不思議がらぬ者はなかつたといふ話かく

して十年を無爲に過ごした彼等は明治四

十三年の一月となつて口ノ津港に於ける

捲き込事業の廢業と共に任意の行動をと

る事となり其炭部分は島に殘るのもあつ

たが籠見島では折角移住したものを此儘

逆戻りされては一大事と同縣知事から

三井鑛山部に交渉があつて我に三井より

三池港に引取ることとなつて目下の納品

が絶てられた次第である（宮田生）

・低廉な賃金

— 「運炭」・「選炭」作業

・・・　日役給　出来高払い

— 勘売場での生活物資調達

— 「美名登農園」での農作業による

食料調達の「許可」

—　失業することで「職住」を同時に失う恐怖

⇒ 1918.9 万田坑ストライキ
・・・「スト破り」として雇用される与論出身者

「三池鉱業所萬田炭坑は既報の如く形勢未だ不穏にして（中略） 昨八日採炭夫全部同盟罷業運動に着手し坑内に入れるは<u>只沖縄県与論島の与論人</u>並に新参炭鉱夫外約百四五十名に過ぎず他は悉く休業を為したれば炭砿社側にては万一を慮かり十分に警戒しつつあり」

◎萬田炭坑尚不穏
▲宮原坑も

（『福岡日日新聞』1918年9月9日）

⇒ 1919. 9 労働争議の発生（「陳事件」）

「三池港石炭荷役専属人夫として、鹿児島県大島郡与論島人を使役し、内地人とは生活風俗の異なる処より別に三川町与論長屋の一廊を設け一千三百名の一大家族は、廊内廿七棟割長屋に居住せしめ、男女労働者六百二十四名は終日三池港石炭積込の荷役に従事しつつあるが、従来<u>彼らの生活状況は内地人と比較して極めて低級にあり、朝鮮人以上の粗食に甘んじ</u>、労働能率は監督宜しければ却て内地人以上の成績を示し、之まで殆んど無意識的に従順なりしが、最近物価の高騰と外囲の刺激に依り与論人部長連は、<u>内地人と労働賃金の差額甚しきに不平を生じ</u>、・・・」

（『福岡日日新聞』1919年9月10日）

輿論島長屋騒ぐ

三池港石炭荷役人夫連

賃金値上一般人夫と同様待遇要求

三池港石炭荷役人夫連は賃金値上げ及び待遇改善の要求を掲げ内地人と生活風俗の異なる所より別に三池輿論長屋の一部を占領し一千三百人の一大集団は廠内に比し大なる勢力を以て其要求貫徹に奮闘せしめ現在なほ解決に至らず

百廿餘名の輿論人は事務所に押掛け陳氏は途中にて面部を殴られ其他数名は負傷し後に警官隊の出動を見たが警官隊は輿論人の暴行を見て之を制止せず

貨車衝突

貨車二臺破損

鳥栖驛の椿事

「不平に充ちた矢先八日夜業問題が導火線となりて勃発し何れも泡盛焼酎を呷り一杯機嫌に乗じ暴行をなしたる次第なるが彼等は一般労働者と風俗人情を異にし言語も充分に通ぜざるより常に双方の諒解を欠き一面には彼等団結力の強きを頼みて自己の主張を叫び三池鉱業所及び大牟田警察署等の慰撫懇諭も更に聞かず。

（中略）三池鉱業所藤村秘書は語つて曰く「（中略）内地の一般労働者の待遇と異なる所なく其他萬有る手段を以て彼等の生活に安定を与えつつあるも何分彼等の教育程度低きと風俗人情を異にせる点より予て内地労働者中の間に睨み合ひの紛擾を生じ百方慰撫せるも諒解を需め難く目下夫々懇諭中なれば遠からず平穏に帰するなるべし」　（『福岡日日新聞』1919年9月11日）

・1920年3月　三池共愛組合発足
　　・・・　労使協調機関　　福利厚生／労務管理

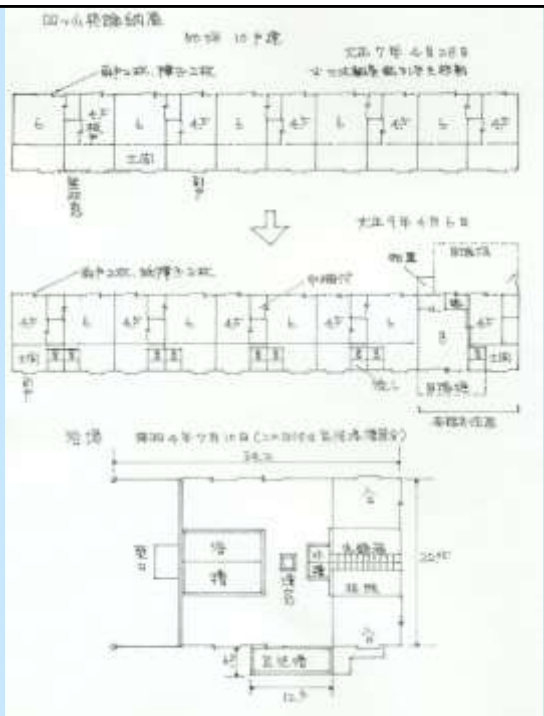
・同時に与論出身者を対象とした「与論共愛組合」も組織
　　・・・　「名目的賃金」の付加、
　　「与論社宅」近辺に売勘場設置

・坑内労働への一部配置転換（1922.7.10）
　ー　港湾荷役の機械化に伴う人員の「合理化」
　　・・・　与論島出身者の一部を坑内労働に

■　集住地区「与論社宅」

◎　「与論社宅」

「位置は福岡県三川町にあり、地は諏訪川の清流を隔てて大牟田町に接続し、前方は有名なる三池港に面し、（中略）　戸数二一〇　人口七六〇（内稼働者二八四、家族四七六）よりなる集団的部落で、俗に、三井の与論社宅と称す、外に社宅外に散在し雑業に従事するもの百名位ありと云う。」　　（『奄美』1928年5月号）



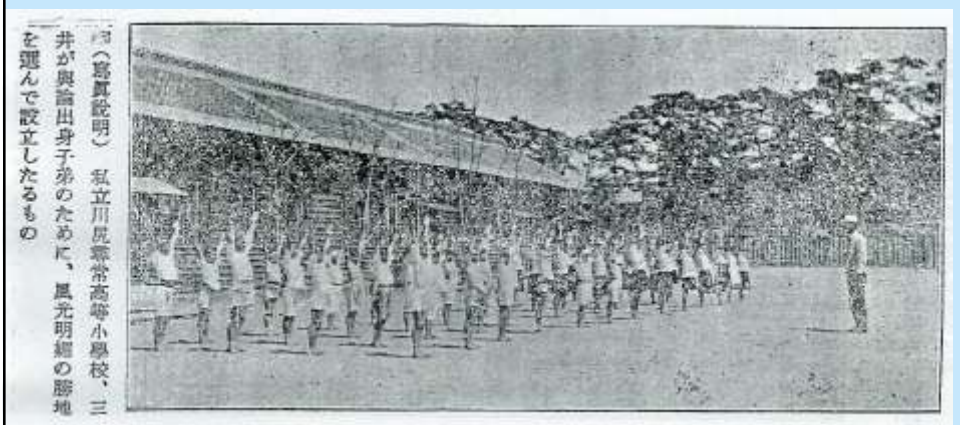
◎三井鉱山による私立三井万田尋常小学校三川分教場の開設

「小学教育としては社宅構内に、三井会社経営の小学校あり、その設備完全にして、与論子弟のみを教育しつつある。目下の児童数は一三八あり、本校卒業者中には高等専門中等の諸学校を卒へ、各方面に活動しつつある人材が多い」

（『奄美』1928年5月号）

「（明治）四四年五月に（中略）三川分教場を置いたが、これは三川村に住む与論島人夫の生活が、全然内地人と断絶してゐた為め、その子弟を一個所に纏めて教育せねばならかった関係による（其後与論人夫の完全なる内地同化により、昭和十一年三月同分教場は廃止され、児童は公立小学校に編入した）。」　（『三井鉱山五十年史稿』，）

・・・「与論語追放運動」、「生活改善運動」、
3つの「禁止事項」（言語、服装、荷物の運び方）



『奄美』1928年5月号

◎　金毘羅神社建立

「時代思想の感染を防止し、思想を善導する敬神思想を涵養し、皇室中心、祖先崇拝の大精神を要請するにありとし、東氏自ら四国讃岐国琴平神社に参詣し、ご神体を奉持し、琴平神社を建設し、毎年三回大祭を行なひつつありと云う」　（『奄美』1928年5月号）

「創建費三千円を要し之は各自の拠出及三井の寄付で成ったものである」　（『奄美』1934年10月号）

Ⅲ　集住地区の撤去と新設

■　組織化の端緒

・八八同志会の結成（1933）
「生活改善・文化向上の運動体」
「与論精神の神髄・開拓精神を受け継ぎ、理解されない与論人の優秀性をあらゆる機会を捉えて市民に示そうと・・・」
（『三池移住五十年の歩み』）

・1934年には大牟田奄美会が創立

「大牟田奄美人の大部分が与論村人たることは以上の記事で明らかであるが外に官吏社員、実業その他与論村人以外の郷土出身者が約二十戸位ある。尚先に与論村人数を一千五百と記したが、実はその中には沖永良部出身者二十名を始め数名の本島徳之島出身者をも含んでゐる。彼地ではこの区別なく総てこれを与論人と称してゐるので暫くこの呼称に従って記述した。」

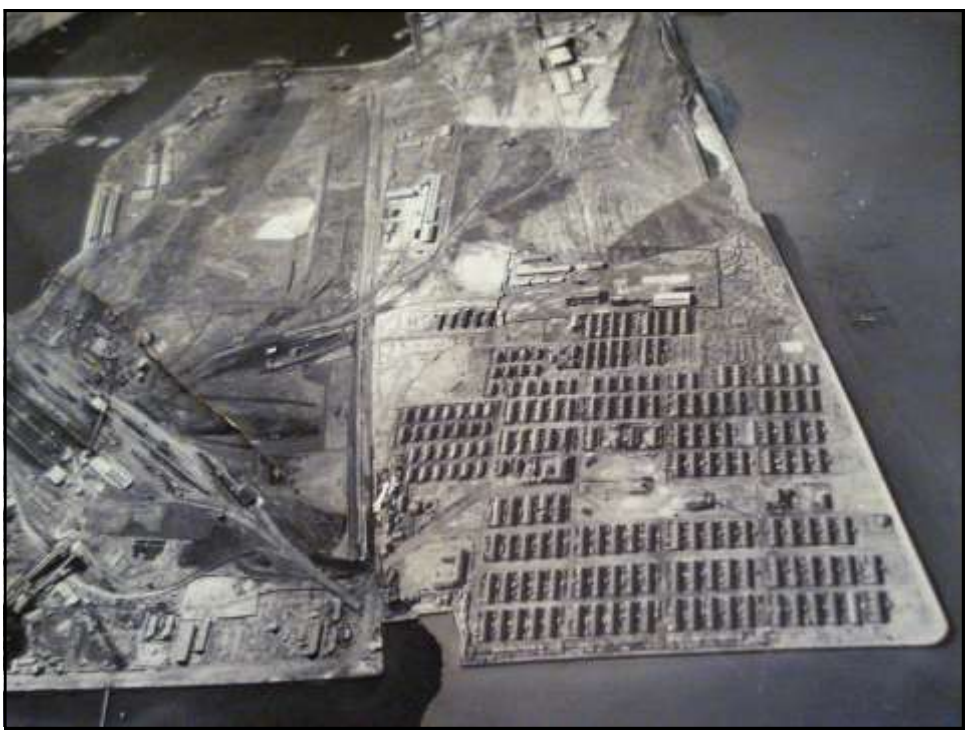
（『奄美』1934年10月福岡特輯号）

■ 社宅の新港町移転

・「与論社宅」の所在地での三川坑開坑が決定
⇒ 社宅が新港町に移転（1936）

・新港町 ・・・ 新設の「与論社宅」（港務所社宅）、三川坑社宅
⇒ 集住地区としての新港社宅
・・・ 戦時下において、隣接の敷地に朝鮮人収容所と俘虜収容所も設置

1951年頃の大牟田周辺
大牟田市
川尻
原中
藤田
生米



■ 社宅の新港町移転

・与論同志会の結成（1938）

宣言綱領

「一千六百余の人口を抱擁すといえども殆んど総てが終始一貫船積人夫として労働し、住居又與論長屋と称する一ヶ所に集団し、其の生活は全く地方人と没交渉にして、為に真実の与論同胞が理解されず、一種特殊人種なるが如き誤解を招く」

「一、従来ノ与論ノ生活ニ対シ検討ノ上新生活方法ヲ樹立スルモノトス」

Ⅳ　第2次世界大戦後の状況

■　納骨堂建設の動き

・狭小化した墓地に代えて、納骨堂建設計画が浮上

　— 戦後初の大牟田市議選で当選した
　　川畑里住（かつての与洲同志会会長）主導

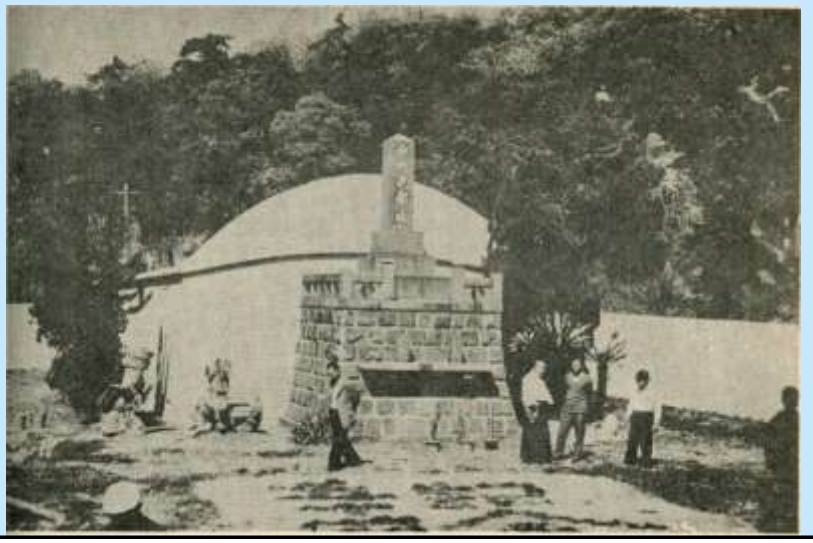
・同郷者の寄付、及び設立・運営にあたる
　　「与洲奥都城会」の会費収入

　— 1947年3月に大牟田市有地（公園内）に
　　神道形式の納骨堂（「奥都城」）が完成

⇒　大牟田・荒尾地区における
　　与論島出身者ネットワークの中核に

※　神道形式

・・・ 与論島における廃仏毀釈、戦前からの金毘羅信仰、
幹部と懇意の神官の存在



■「奄美復帰運動」の展開

・1951年3月　与論村から与洲奥都城会長宛てに
「復帰運動」協力要請の電報
・1951年6月　全国奄美代表者会議（東京）参加
7月　新港社宅クラブにて集会
8月　「奄美諸島日本復帰要求大会」（新港クラブ）
― 請願趣意書決議、署名活動（約1300名分）
・1953年8月23日
同月8日のダレス声明を受けて、与洲奥都城会
による「奄美大島完全復帰感謝祝賀会」開催
・・・ 150台の自転車を動員した市中行進、
新港クラブでの祝賀行事、提灯行列

Ⅴ　労働争議とその後

■ 三池労組の結成（1946）

― 当初、労組への参加に否定的な与論出身者が多数
・・・「誠実なる労働者」としての
表象の維持を目指す考え
― 三池労組港務支部結成
・・・ 以降、与論出身者の労組への参加が進む
港湾荷役の労働条件を坑内作業と
同等にする要求の達成

■　三井鉱山による「合理化」

・レッドパージ、人員整理への抵抗と労使対立

　－　与論出身者の内部での方向性をめぐる対立も顕在化

　　・・・　労使協調路線の旧指導者

　　→　多くが三井鉱山の職員に昇格

　　・・・　組合活動、学習活動の活発化

　　→　新港地域分会（1952）、炭婦協（1953）

■　三池争議

・三井鉱山による1297名の指名解雇通告（1960）

　　・・・　うち、与論出身者は37名

　－　職場、社宅を舞台にした争議の展開

・組合分裂と第2組合の結成

　－　与論出身者内部でも対立激化

　　・・・　納骨堂の分割も議論

　　・・・「炭っ子グループ」

⇒　第1組合幹部の与洲奥都城会会長が辞任し、三井化学出身の市議会議員が会長に就任して収拾

「「姉ちゃん、姉ちゃん、第二組合が団体で荷物をとりに来たよ、はよ、はよ」と玄関の戸をガタガタ させながら、妹が入ってきた。私はすぐ「Yちゃん方も荷物を取りにきたね」と聞きました。そして、靴もそこそこに私は走りました。

Yちゃんというのは、私よりも一つ年下で、隣のHちゃんと大の仲良しでした。私はこの二人よりたった一年上でしたが、弟のように可愛がりました。

（中略）

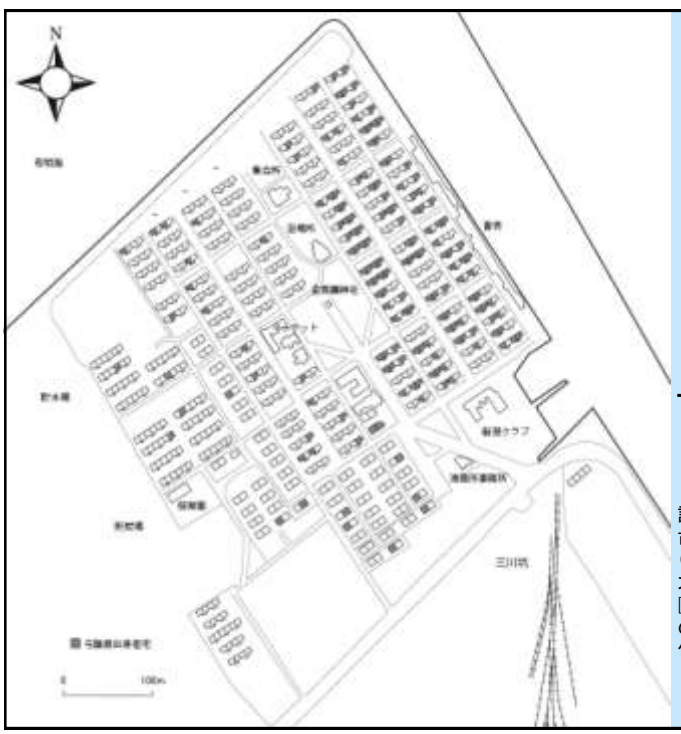
ところがこのYちゃんの両親は、（中略）第二組合にはいり、とうとう、会社の料亭にそかいしてしまった。それが労働者をうらぎった本人だけそかいするのなら、まあいいんです。私たちの親友であるYちゃんまで、とうとう、ひっぱって行ってしまったのです。　（中学2年・女子）」

（『三池のこども』、1960 、p.6-7）

港務所事件（1960年5月）

■ 「合理化」されていく新港社宅

・戦後、新港町社宅に他職場の労働者も入居していく
・1952年4月　新港社宅へのバス路線開設
・1963　三川坑炭塵爆発事故
・1965　三井鉱山から、三井三池港務所が分離
・1970　第1次社宅合理化　117戸解体
・1971「108棟の闘い」
　　— 機械工場増設のための社宅撤去
・1974　有明炭陸送反対運動
　　— 有明鉱からの石炭輸送車通行による生活環境の悪化
　　— 近隣敷地の貯炭場拡大



大牟田市新港町の与論島出身者集住地区（1967年）

註）善隣出版図書（1967）「大牟田市住宅地図」、大牟田市役所（1981）「大牟田市国土基本図」、大牟田・荒尾地区与論会（2005）『与論会だより』第号、および筆者の行なった聞き取り調査をもとに作成。

昭和24年港務所保育園

商店での買い物も非常しめて
1962年7月

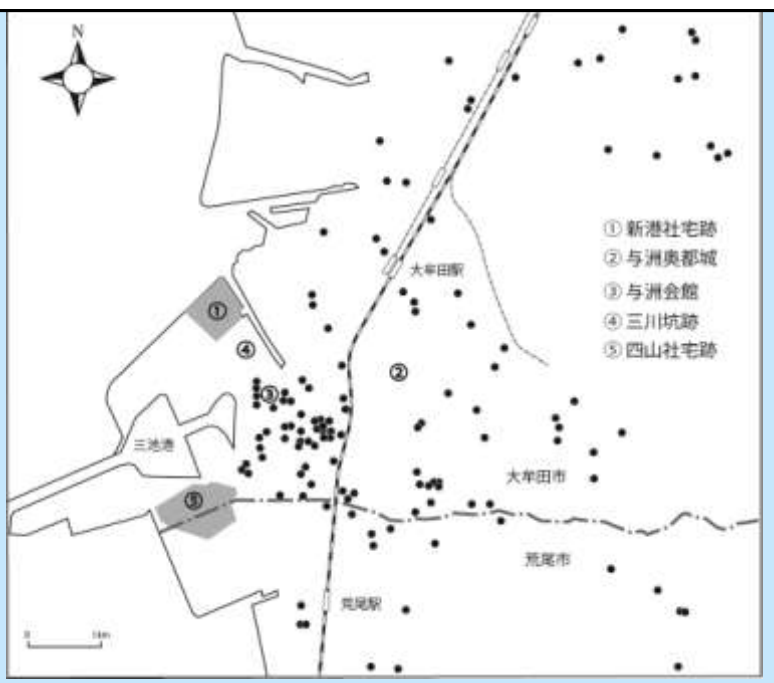
・1974　第2次社宅合理化　20戸解体
・1976　第3次社宅合理化　373戸解体
・1978　ラワン材置き場設置反対運動
・1981　火力発電所建設反対運動
浴場所・集会所閉鎖、西鉄バス路線廃止、
社宅内の売店・理髪店・ポストの撤収
・1985　社宅内の金毘羅神社解体
・・・　大牟田市内の駛馬天満宮に遷座
・1986　新港社宅全域退去の提案
・・・　交渉の末、全世帯が転居へ
最終的に新港社宅に残った世帯
―　港務所6戸（4戸）、三川坑16戸（3戸）
・1997　三池炭鉱閉山

⇒「合理化」に伴う地域人口の激減
・・・　断続的な与論出身者の転居
（「帰島」、他地域の雇用促進住宅等）
⇒　新港社宅の「整理」による集住地区の消滅

大牟田市新港町の人口推移

	1965年	1970年	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
世帯数	697	518	334	187	79	15	15	13	13	10
人口総数	2,839	1,830	1,107	626	231	32	34	27	23	17
男	1,361	883	534	308	120	17	18	16	11	7
女	1,478	947	573	318	111	15	16	11	12	10

資料：『大牟田市統計年報』（各年分）。



大牟田・荒尾地区与論会会員世帯の居住分布（2002）

Ⅵ　同郷団体活動の変容

■　奥都城会から与論会へ

・戦前期の与洲同志会を基盤に「与洲奥都城会」設立（1947）

　　－　納骨堂の設立・運営団体として
　　同時に同郷団体として

・1977　団体名を「大牟田・荒尾地区与論会」に改称

　　－　納骨世帯以外にも拡大

・1983　三港与洲会館開館

　　・・・　三池港務所の旧職員住宅を借用

三港与洲会館

・1996　与洲奥都城改修再建

⇒　現在も与洲奥都城の管理・運営が
与論会の主要業務の1つ
・春季・秋季大祭の開催、お盆の開放、毎月の清掃

■　地域を越えた与論出身者との連携

・1966　全国与論会連絡会結成
　　・・・　東京、中部、関西、大牟田、鹿児島、
　　名瀬、沖縄、与論町役場
・1969　与洲奥都城会郷土訪問団

・1977　団体名を「大牟田・荒尾地区与論会」に改称

・1978　満洲開拓犠牲者合同慰霊祭（与論町）参加
・1981　田代盤山入植35周年記念祝賀会参加

■　地域を越えた与論出身者との連携

・1985　口之津町親善訪問
・1986　上野應介顕彰碑、口之津移住開拓民の碑
除幕式（与論町）
・1998　口之津移住百年祭記念祝典（大牟田）

・2008　大牟田大蛇山祭り「一万人の総踊り」パレード参加
―　一方で、公に「与論」を名乗ることに対する
会員からの根強い抵抗感の表明も

大牟田・荒尾 地区与議会

大牟田・荒尾地区与議会

Ⅴ　まとめにかえて

◎ 三井鉱山の労務管理との深い関連性

・ 社宅（炭鉱住宅）という居住空間

・・・ 集住地区の形成・消滅の直接的要因

強固な共同性 ／ 政治対立に伴う分裂の危機

参考） ILOの労働者社宅に関する勧告

「労働者の拘束的役割を果たす「使用者による住宅の供給」の禁止」（早川2014）

・・・ 外部からの接触　会社、活動家、メディア…

Ⅴ　まとめにかえて

◎ アイデンティフィケーションの様態

・否定的なアイデンティフィケーション

— 生活改善運動、分教場での「同化」教育、

他者化されたまなざし ⇔ 八八同志会

・肯定的なアイデンティフィケーション

→ 文化的抵抗、自己肯定としての

大牟田大蛇祭り参加

Ⅴ　まとめにかえて

◎アイデンティティの複層性

－　同郷者としての連帯 ／ 排他性
　　・・・　組織化・相互扶助、凝集性、分断化
－　労働者としての連帯 ／ 政治性
　　・・・　出自を越えた同一化、分断化

⇒　複層的な「原初的紐帯」と「社会的紐帯」
・・・「労働者としての連帯」が困難な今日の状況
例）　新港社宅解散（1986）、三池労組解散（2005）

Ⅴ　まとめにかえて

◎アイデンティティの複層性

・「与論会」から「ユンヌンチュの集い」（同好会）
への模索
→　行事への与論出身者以外の参加

例）毎年恒例の「大牟田与論教育文化訪問団」、
大蛇山踊りへの大牟田市教職員有志の参加

Ⅴ　まとめにかえて

◎ 同郷者のなかにみられる
多様なネットワークの広がり・交差

・出身者以外を含む人的ネットワーク
— 複数のネットワークの中から
選択される同郷者ネットワーク

・「コミュニティ」の紐帯となるカテゴリーの揺らぎ
— 都市内部における
同郷者集団のアイデンティフィケーション
— 介在する資本・企業の存在

参考文献

井上佳子(2011)『三池炭鉱「月の記憶」:そして与論を出た人びと』, 石風社。
鰺坂学(2009)『都市移住者の社会学的研究:「都市同郷団体の研究」増補解題』, 法律文化社。
大牟田・荒尾地区与論会編(2001)『与論島から口之津へ　そして三池へ』, 大牟田・荒尾地区与論会。
岡橋秀典(1987)「瀬戸内海島嶼部における人口流出と都市同郷団体」,『内海文化研究紀要』15, pp.15-26。
川崎茂(1973)「日本の鉱山集落」, 大明堂。
ジョンストン, R. (2002)『場所をめぐる問題:人文地理学の再構築のために』, 古今書院。
新藤東洋男(1965)『三池鉱山と与論島』, 人権民族問題研究所。
髙橋伸一編(2002)『移動社会と生活ネットワーク:元炭鉱労働者の生活史研究』,高菅出版。
堤研二(2009)「高島炭鉱閉山に伴う人口流出の分析」,『大阪大学大学院文学研究科紀要』46-2, pp.1-113。
戸木田嘉久編(1989)『九州炭鉱労働調査集成』, 法律文化社。
冨山一郎(1990)『近代日本と「沖縄人」:「日本人」になるということ』, 日本経済評論社。
中西雄二(2007)「奄美出身者の定着過程と同郷者ネットワーク:戦前期の神戸における同郷団体を事例として」,『人文地理』59-2, pp.172-187。
松本通晴・丸木恵祐編(1994)『都市移住の社会学』, 世界思想社。
丸井博(1966)「工業の地理学的研究:石炭鉱業の研究を中心として」、『人文地理』18-6, pp.643-652。
森崎和江・川西到(1971)『与論島を出た民の歴史』, たいまつ社。
矢田俊文(1975)『戦後日本の石炭産業:その崩壊と資源の放棄』, 新評論。
山口覚(2008)『出郷者たちの都市空間:パーソナル・ネットワークと同郷者集団』, ミネルヴァ書房。
吉岡宏高(2012)『明るい炭鉱』, 創元社。
与洲奥都城会(1966)『三池移住五十年のあゆみ』, 与洲奥都城会。